

2023年度 ACY アーティスト・フェローシップ

申請状況について

本助成は、アーティストを育成し、そのキャリアアップを支援するための助成制度として2016年度より始まり、制度名称・内容を変更しながら8回目の募集となる。

日々新しい表現を追求し、構想を磨き、創作活動にはげむアーティストを対象とし、必要な資金やネットワーク、新しい表現や活動の場所の獲得など、アーツコミッション・ヨコハマの伴走的支援を通じ、自身のキャリアアップを目指すための支援プログラムである。

本助成において、今年度から大きく変更した点が二点ある。年齢制限の撤廃、および横浜市内の拠点での滞在および活動の実施である。

昨年度までは若手アーティストの支援を目的とし、39歳以下という年齢制限を設けていたが、それを撤廃したことで、【20代23件、30代68件、40代30件、50代13件、60歳以上2件】と幅広い年齢層からの申請があった。アーティストにとって、支援を受ける必要があると考えるタイミングが、年齢だけで区別できるわけではないということを確認する結果となり、支援のタイミングについては、審査会においても議論的となった。

また、昨年度まで「横浜に活動拠点があること」を条件としていたが、「横浜を活動拠点にする」アーティストを増やしたいという考えをもって、横浜市内の拠点での滞在および活動をすることを活動計画に含む申請とした。アーティストの活動場所として、横浜の各地域の可能性を探る試みとしての変更だったが、この結果、下記のように、日本各地からの申請があり、影響を強く感じる結果となった。

【所在地別分布：横浜市31件、市外神奈川県17件、東京都53件、その他関東地方9件、北海道1件、東北地方3件、中部地方7件、近畿地方6件、中国地方1件、九州地方5件、海外5件】

地域に開いたユニークな活動をするコミュニティ拠点に表現を追求するアーティストが入り込み、「(内容が)身近なアート」ではなく、「(関わり方が)身近なアート」を展開することで起きる予測不可能な化学反応を期待している。

今年度は136件の申請が寄せられ、昨年度の申請数56件に比べ、倍以上の申請があった。(分野内訳：美術分野81件・舞台芸術分野55件 ※分野は申請者の申告による)

審査員による一次選考(書類選考)と二次選考(面談選考)を経て5件を採択としたが、ごく限られた人数にしかならぬ、狭き門となったことが今後の課題である。

選考委員会は、5名の有識者による審査員で構成され、選考にあたっては、下記の審査基準(3つの評価項目)にて、書類・面談を通じた採点を基準に合議のもと選出した。

審査基準

【趣旨理解】助成趣旨を理解した提案になっているか。

【独自性】芸術としての手法や形態、また思想や題材等、優れた発想や独自性を有しているか。

【実現性】計画および資金使途が明確であり、活動規模やスケジュールが適切か。

審査員（敬称略／順不同）

天野 太郎（東京オペラシティアートギャラリー チーフ・キュレーター）

岡本 純子（公益財団法人セゾン文化財団 シニア・プログラム・オフィサー）

野上 絹代（振付家・演出家、多摩美術大学美術学部演劇舞踊デザイン学科専任講師）

藤原 徹平（フジワラテッペイアーキテクツラボ代表、横浜国立大学大学院 Y-GSA 准教授）

山峰 潤也（キュレーター、株式会社 NYAW 代表取締役）

以上の方針のもと、5 件を採択した。

審査員総評

天野 太郎 (東京オペラシティアートギャラリー チーフ・キュレーター)

ACY アーティスト・フェローシップ助成の審査に今回初めて参加した審査講評を記します。これまでもこういったアーティスト支援助成の審査に携わったことがありますが、他に例がないわけではありませんが、市内の幾つかの地点をレジデンスの対象としている点は特徴的なプログラム内容だと思われます。実際の申請書類にも、そうしたレジデンスにおける作品制作に加え、近隣地域の人々の連携を想定した提案が様々見受けられ、その内容の如何が大きく判定に影響しました。こういった活動拠点と地域の連携については、大きく2つの傾向があると思います。一つは、地域の人々を作品に取り込もうとする提案、今一つは、地域の人々を主として美術を感受してもらおうとする提案です。いずれにしても、いかに効果的な活動が期待できるかも判定の基準になりました。

また、応募者のアーティストの幅広いステータス（当事者性や幅広い年齢層なども含め）を昨今のLGBTQなどに見られる様々な価値観の社会的容認への動きにも鑑みながら、どうこのプログラムが受け入れるかは大きな課題となったのは意義深いと思います。受け入れる地域の人々からの理解や協力、支援などは、主催者側の大きなミッションでもあり同時に、そうした理解形成そのものが、アーティストの表現活動の核になるからです。

いずれにしましても、アーティストの制作過程やその結果を自己完結的な行為として捉えるのではなく、あくまでもアーティストと各レジデンスの地域社会との有機的な関係構築として今後のこのプログラムを展開させていく事に大きな意味があると感じました。

岡本 純子 (公益財団法人セゾン文化財団 シニア・プログラム・オフィサー)

2023年度ACYアーティスト・フェローシップ助成は、年齢制限と活動拠点の限定をなくした結果、申請件数が前年度から倍増以上となった。これまで対象となっていなかった40代以上、または横浜以外を拠点とするアーティストからの申請も多かったことから、需要の高さを実感した。最終的に採択されたアーティストは40代が3名、拠点は全員横浜以外となり、意義ある変更だったといえよう。

一方で、ジャンル別の申請者の割合は美術が多数を占め、舞台芸術、特に演劇分野からの申請が少なかったのは、申請要件に「ACYが指定する横浜市内の拠点での滞在（最短6泊7日）」が含まれたことで、集団創作を基本とするアーティストが申請しにくくなったためではないかと思われる。地域住民との交流も求められており、これらに関心の高いアーティスト向けになったともいえる。採択されたアーティストたちが要件を満たしつつ、自らの本来の活動の価値をいかに高めるかに注視したい。

一次選考（書類選考）では、創作活動における課題や問題意識が優れているか、それが質の高い作品として表現されているかに加え、横浜での滞りに積極的な意義を見出した申請内容になっているかにも注目した。二次選考（面談選考）では他の審査員の、自分にはない視点、知見に基づいた面談での質問や、その後の討議での意見が大いに参考になった。最終的に5名を選ぶのは困難であったが、そのアーティストが今回、この助成を受けることの意義も訴えた。

助成申請では自身の作品、活動の言語化能力が必須である。書類から作品、活動のコンセプトや意義が明確に伝わっているかどうか、提出前に誰かに読んでもらうのも有効かもしれない。もちろんポートフォリオの作品で表現されていることも重要である。あまりに倍率が高くなり、二次選考に進むのすら困難になってしまったが、二次選考に至らなかったアーティストの中にも私が応援したい方は複数おられたので、一度であきらめず、申請書の言葉も磨いて、また申請してほしいと思う。

野上 絹代 (振付家・演出家、多摩美術大学美術学部演劇舞踊デザイン学科専任講師)

今回初めて ACY アーティスト・フェローシップ助成の審査に関わらせていただきました。美術・舞台芸術の境なく様々なアーティストの思想や展望に触れることができ大変刺激的な審査期間でした。

一次選考では主に各々の【独自性】と【地域住民との交流で起こる化学反応への期待】、という二点に重きを置いて審査をしました。書類の話だけでいうと、独自性や自由度という観点ではどうしても「美術>舞台芸術」と見えてしまいがちで、私にとって高評価の舞台芸術家は奮わない結果が多く、個人的には少しモヤモヤを抱えた一次選考となりました。それは、助成の規程を変えれば解決なのか、というとなんだか違うように感じています。もしかすると、舞台芸術のアーティストが他ジャンルをもう少し意識した上で自身の強みを自覚し、もっと打ち出すべきなのかもしれません。そう考えると、この助成は自身のフィールドの外に意識を向かせる珍しいフェローシップなんだと思います。今書いていることは全てそのまま私自身に返ってくる話でもありますので、また私もいちアーティストとして舞台芸術をもっと自由に、その魅力をもっと外に拓いていく言葉を磨かなければと痛感する機会になりました。

二次選考では「税金からなる助成金をどう（誰に）使うか」ということが山場だったように感じます。結果、5名のアーティストの方々が選出されました。面談で構想を聞いていると、「アーティストにとっても、地域の方々にとってもきっと刺激的なチャレンジになるだろう」と感じ、それは私の中でとても納得の行く採択理由となりました。皆さんの助成期間での活動にとっても期待をしています。

また、今回採択に至らなかった方々も、この助成はとにかく内容が「独自」でチャレンジしがいがありますし、年齢制限はございません。ぜひまた応募していただければ、と思います。

藤原 徹平 (フジワラテッペイアーキテクトラボ代表、横浜国立大学大学院 Y-GSA 准教授)

ACY のフェローシップは、美術分野と舞台芸術分野の2領域にまたがる点がユニークである。今年からフェローシップの対象の年齢制限がなくなり、以前に増して多様なキャリアと方法論を持ったアーティストから申請があった。

すでにある程度キャリアがあるアーティストに対しては、このフェローシップでどのような変化を得ようとしているのか、という視点で審査した。できることならば、横浜でしかつくりえないような作品をみてみたい。ACY のフェローシップが作家にとってよき上昇転換点となることへの期待がある。

逆に、若手のアーティストには、ぜひこのフェローシップでそれぞれ自分の軸を固めて欲しいと思った。ジャンルや興味に関係なく、子供にも伝わるような「伝達性のある表現であるか」。それはポップであるということかもしれないし、あるいはきちんとした形式性のあるメソッドを取り入れるのかということでもある。

優れた音楽の演奏家、あるいはダンスの踊り手、演劇の役者、からの審査は難しかった。創作者の定義の幅をきちんと決める必要があるだろうと思う。

私としては、このフェローシップは、アーティストを育てるような場であるべきだと考えている。フェローシップに選ばれた人であっても、企画として不満があるものが多かった。できる限り正直に感想や意見を伝えるメンタリングをへて、有意義なフェローシップにしてもらいたい。(面談選考の結果、選ばれなかった人に対してメンタリングやアドバイスの場がある方が良くもしいない。)

今年から横浜での滞在活動を実施する。リサーチなのか制作なのか上演なのか。その成果は今のところ想像ができない。予測不能だからこそ面白い応答的な場となることを期待したい。

山峰 潤也 (キュレーター、株式会社 NYAW 代表取締役)

昨年まで続いた「U39 アーティスト・フェローシップ助成」を継承しながら、新たにスタートした「ACY アーティスト・フェローシップ助成」は、これまでの趣旨から大きく異なっていた。

- ・年齢制限の撤廃
- ・活動地域が横浜であるアーティストを対象としていたが、活動地域を不問に
- ・横浜市内の指定施設での滞在と地域交流を必須とすること

などが盛り込まれ、地域の若手芸術家のキャリア形成を支援するものから、地域との関わりから市民との文化的交流を生み出し、これからが期待されるアーティストの試金石となることが目的と読み取れる内容となっていた。年齢、活動地域などの制限がなくなったため、申請数が増加し、審査は困難を極めた。しかし、その中であって、おぼろげながら判断基準とすべき視点は以下の点であった。

- ・アーティストが地域に何らかの影響を及ぼす可能性があるか
- ・この地域での滞在が創作活動に影響を及ぼす可能性があるか
- ・アーティストのキャリアにおいて重要なタイミングとなるか

これらの点からも、地域性を踏まえた活動設計ができているかどうか、また、より発展的な創作に繋がるか、もしくは、この機会を得ることで活動を維持していくことに繋がるか、といった目線での議論が審査会にてなされることとなった。これまでは年齢の基準が設けられていたため、若さとクオリティのバランスから判断していたが、今回は、活動を途絶えずに、またこの機会に知られて欲しいと願う申請者を含んでいくこととなった。こういった視点で行われる助成金は非常に稀有であるが、議論のなかでもその重要性が認識されることとなった。

アーティストにはそれぞれの人生のタイミングがある。そのため、早熟する人間もいれば、時代の価値観とすりあってくることが遅くなることもある。だからこそ、年齢という枠で切っていくことだけではなく、柔軟な視点で新たな可能性を支援する枠組みとして、育ち、その価値が認知されていくことを期待したい。